

迎えに来て……



▲ 太陽の光さえ差し込まない犬舎は、飼い主を待ち続ける犬たちの鳴き声で溢れています。

「事実」に限りなく近い

ある子犬の物語②

「この用紙を提出したら、今後一切異議申し立てはできません。二度と連れて帰れなくなります。よろしいですか？」との、嘉穂保健福祉環境事務所の職員に、ご主人さんはゆっくりうなずいて、「犬の引き取り依頼書」をついに提出した。

そう。ボクたちは、新しい飼い主が見つからなかったから、とうとうここに連れてこられたんだ。そしてボクたちは「犬舎」という所に連れていかれた。

そこには、ボクたちと同じような境遇の仲間がたくさんいた。中には野良のかわいいお兄さん犬もいた。この蒸し暑くて暗い犬舎で、ボクたちは

もう一度、ご主人さんが来てくれるのを、じっと待ち続け

たんだ。そして回収日の朝、ボクたちは犬舎から出された。

「やった、おうちに帰れるんだ。でも、何だか案内する人の顔が悲しそうに見える。それに何だか空気が重いよ。どうして？ ボクたち、おうちに帰れるんでしょ？」

消えていく生命

回収車に乗せられたボクたちが運ばれたのは、ご主人さんの家ではなく、古賀市にある(財)福岡県動物管理センターだった。ここは、引き取り依頼をされた犬や、飼い主が見つからなかった犬が最後に行く所……

回収車から降ろされたボクたちは、そのまま犬房へ連れ

て行かれたんだ。そして、冷たく狭い部屋に押し込められ、どこからともなく炭酸ガスが出てきた。ボクたちは意識がなくなっていく。

「可愛いね」って抱っこしてくれたご主人さんの笑顔、大好きだったお母さんが、最後に脳裏をよぎったよ。

これが、僕が生まれてたった数ヶ月間の思い出……